■「パパ」という男の一番長い日　2006年8月18日

僕は父が怖かった。家に父が居るだけで意味のない緊張があった。柔道をしていた父親の太い腕。両親が離婚して、妹と二人だけで中2の夏、九州の大分に引っ越して、父親と同じ中学校に入った。何があったのか知らないが、父は柔道の顧問の先生を裏山まで、こん棒で追いかけて怖れられた人だ。そのエピソード一つとっても若い時代のいたずらというより、札付きのワルだったのだと思う。そのような話を、転校早々に、当時いた先生から聞かされ、ついでに「お前は洋一の子か？」と当時からいた先生から特別な目で見られた。その問いかけは「お前も、父親と同じ危険人物なのじゃないか？」と探りを入れられたのだと思う。

父親の大きな声。機嫌が悪くなった時に出る舌打ちは、僕の体を芯から震えさせた。小学生だった頃は、プロレスラーのジャイヤント馬場でも、父さんには勝てないと強く信じていた。

中学1年の時に、教室で腹にすえかねることがあり、僕が友達と殴り合いのケンカをした時。担任からの要請で、口を切った友達の家に、父親と謝りに行った帰りの道。子供の時のように父親が僕の手をとり、手をつなぎ歩き出した。殴った同級生が事実を隠そうとする言い訳じみた態度にも父親は何かを感じたのか、何も言わない僕に、父親はしきりに「やる時は、やらなあかん」と、しきりにくり返した。あの時の父親の機嫌の良さは今でも不思議に憶えている。

父は破天荒な人だった。でも父親としての強さや威厳というものは、あの人から教わったような気がする。

幼時期、父の会社の社員の人に僕は風船をふくらましてとねだった。その社員さんは「のぶくん、ゴメン。オッちゃんよう膨らまさんわ」と断られた時。僕はしつこく「オッちゃん、大人やんか！膨らませられるやろ。膨らましてよ」と重ねて、ねだった。

父親がスクッと席を立ったかとおもうと、幼い僕の頭をこづいて、戸外につれ出し、幼稚園にいく前の僕に「ええか。パパはな、自分の従業員でも、目上の人にあんな態度をとったことはないわ。お前のあの態度はなんや」とすごい勢いで叱った。僕がしつこく風船を膨らませることを、ねだった社員さんは喘息の持病があったことを僕はのちに知ることになる・・・・・・・高校の時にも、進路のことで、可愛がられた担任と親しく、話している僕の態度にも、父は眉をひそめた。

大人に権威を感じない若者！アメリカで勉強していた頃に感じたことだが、アメリカでは、目上の人とも親しく話す。講師に対しても同じ。アジアの中では、日本の若者は、すんなりなじんだ。でも韓国や中国の若者は、そのフランクさに最初は戸惑っていたように思う。

先日、テレビで暴走族の若者が警察官に食ってかかるシーンを見た。別の日に、街で年配の警察官に、自転車の二人乗りを注意された高校生らしき女の子達が、しぶしぶ一度は降りるが、また、まだ数メートルも離れていない警察官が見える場所で、再び二人で自転車にまたがり走り出した。若い時の自分を振り返っても彼女達の面倒な気持ちはわかるが、見えるところで堂々と二人乗りを始める彼女達を見て、警察官も、今では怖い対象ではないのだと思った。

学校でも、教職員の権威の崩壊ぶりはすごいようだ。もちろん、どうしようもない不甲斐無い先生にも問題の原因がある。されど子供達からしてみれば大人であり、先生である。でも、子供達が担任をなめきってしまって、学級崩壊しているクラスも少なくない。休憩時間ギリギリにトイレに行き、授業開始に全員が集まるのは、チャイムが鳴ってから5分後がざらだと言う。「おしゃべりをしないで」と先生がうながすと、その言葉を聞こえないように、無視するように大げさに話し始める生徒。もちろん、すべての教室ではないし、すべての学校ではない。

僕は今の子供が悪いとは思わない。彼らが威厳を感じない今の大人達にも大きな問題の原因は潜んでいる。彼らは、「尊敬できる大人や先生がいないから」と言う。それは彼らの都合の良い言い訳か、本音かは、僕にはわからない。でも、子供達は大人達のタテマエとホンネのズレをよく見ているし、知っている。

国民のためと言いながら、自分のエゴむき出しの政治家。戦争が絶えない世界情勢しかり。「キレイごとで生きれない」と開き直る大人達。マスメディアを通して、大人の世界への視界がよくなった時代。でもその中で子供達の心は年をとる。子供から夢やロマンを奪ってゆく。

大人の世界が見えやすい社会は、人間には表と裏があるのだという子供達のニヒリズムを生んだ。そして、大人を尊敬しない若者達。お年寄りに席もゆずらない若者達。韓国の友人が日本に来て驚いていた。「日本はお年寄りが住みにくい」と・・・・・

プロボクシングの亀田興毅選手が視聴率を集める。すごい人気者だという。親子愛だそうだ。僕はどうも亀田選手の対戦者へのマナーの無い態度が好きになれない。また、記者会見の態度も好きになれない。強ければ何をしても許される。「親の言うことを聞いているから失われた親子愛だ」と僕の知人は熱く彼のことを語った。

ある大学で、仲間のお金を、ある学生が盗んだ事件があった。盗んだ学生の親が学校に「たかだか2、000円ではないか！うちの子供は優秀で、学校でも主席で入学したではないか！こんなことで学校が問題にするのは、おかしい。子供の将来に響く」と逆抗議されて、閉口したとある教授は驚いていた。
今の時代は勉強していればなんでも許される。優等生であれば、多少、人間的にマナーに欠けていても、親の言うことを聞いて優等生であり続けていることがすべてに優先する時代なのだろうかと・・・・・

「お金があれば何でもできる」と言い切って、周囲を敵にまわしたライブドア前社長のホリエモンこと堀江貴文氏は、やっぱり妬まれたのだと僕は思う。何より恐ろしいのは「世間」という移り気の早さだ。時代の寵児だともてはやされ、成功したい若者の憧れだと言われた彼。彼もやはり「世間」のマスコットだったのだと思う。用が終われば、過去の人だとポンと後ろに捨てられる。

本当に亀田選手の父親が息子のことを愛しているのか。愛しているなら、プロボクシング選手の現

役の寿命は短い。その後に用がなければ捨てられる。その時に必要なのは、人間社会の中で生きてゆくマナーであり、本当の強さなのだと僕は思う。それは、時には、誰かに頭を下げる能力なのだと。なぜなら、誰かとの関係の中で人は生きている。

亀田選手の父親は、息子の長い将来のことを考えないのだろうか？それとも下に弟が二人控えているので、将来も自分は安定だと思っているのか。それとも、あれは一時的な演出で将来に備えて、日常では影でエチケットを教えているのか。そうでなければ、父の息子に対する愛ではなく、自己愛の愛情だ。自分の理想のボクシングのために子供を拳闘の世界へ引きずり込んだだけになる。両親の離婚の理由も教育に対する価値観の違いにあったと言われている。

危険なのは理想教育という権化に引きずられた、エゴむき出しの親の一方的な価値観です。子供に対しての厳しさ。子供に対して許しや妥協がない完璧主義の親達。子供のためではなく、自分のためではないのか・・・・

そうならば、父の愛ではなく、あの厳しいトレーニングも親のエゴになる。僕が怖いのは自分のエゴに気づいていない親だ。奈良で家に火を放った高校生は、今でも医者である父親を尊敬していると言う。その父親も彼を医者にするために、教育には厳しかったと言う。

一番かわいそうなのは亀田選手だ。あれだけ脚光を浴びると、彼に進言してくれる人が誰もいない。親も厳しいことは言わない。１９歳の彼を、テレビ関係者の大人達も腫れ物に触るように気を遣う。僕は、テレビで見ていて、周囲の大人達には情けなくなる。このような大人の社会風潮は子供達に、お金を持てば、成功すれば、強くなれば人間的なマナーはどうでもいい。何でも思い通りになる。何をしても善いのだと思わせることに拍車をかける。

ツッパリ君のカウンセリングをするたびに、「君はいいなぁ」と僕は言う。だって、この後、親が心配して迎えに来てくれるのだろう。それがうらやましい。

僕は妹と二人で九州の祖父母のところに、預けられた。実の祖父は戦争で亡くなっており、祖母は戦争未亡人で、やがて終戦後に再婚して姓が変わった。衛藤の姓を名乗るのは忘れ形見の一人息子だった父だけだった。九州では、僕達は祖母の再婚先の姓が違う家庭にお世話になった。実の祖母は、いつも再婚した家族に気を遣っていた。何かあるたびに「あなたたち、兄妹は迷惑をかけないでおくれよ」と言われ、注意される時は、どちらにしても連帯責任のように「あなたたち兄妹は」とため息をもらした。

だから、僕もその家に気を遣っていた。もしもこの家を追い出されたら、妹と二人、誰かに頭を下げて、寝るところ、泊まるところ、食べものを、その日から確保しなければならない。グレたくてもグレる余裕がない。それを知っているからツッパッテ親に歯向かいながら、親の家に居続ける若者に出合うと甘えていると思う。しかし、当時の僕の環境は、僕にそれでも余りある財産を与えてくれた。それは、人とのコミュニケーション能力を育ててくれたことだ。

精神医学の世界では、過剰に周囲に気を遣い過ぎるのは心理的に問題があるが、まったく、周囲に感謝も無く、気を遣わない人も、心理的に子供過ぎる。誰かの許しの中で甘えている。このままでいけば、亀田選手は特別な内輪集団の中でしか生きてゆけなくなる。ある環境でしか生きてゆけない動物は、本当は強くない。どの環境に放り込まれても適応し生きてゆける本能が、本当に強い動物だ。

人間という種の独自性は、コミュニケーション能力を有する動物だということ。今の時代では、どこの国に行っても、どの集団の中に入っても愛される能力を持っていることが、生きるためのスーパー能力だと僕は思う。

なぜ、亀田選手のわがままな態度を世間は許すのか。それは彼が何かを与えてくれるからだ。興奮だとか、興行収入だとか、その与えてくれる特別なものが無くなると、彼は世間から捨てられる。それを考えるのが親心ではないのか？「健全な肉体に、健全な精神は宿る！」強いだけなら、若さの下り坂と共に彼は世間に見捨てられる。スターだった貴花田にしても、引退してからは愛嬌のあった兄の若花田ほど世間からは相手にされていない。

ドル箱スターだから周囲の大人が頭を下げて、人気がなくなったら捨て去るのは、大人達のズルさだと思う。亀田選手の人気がなくなった時に、誰が彼のファンでありつづけるのだろう。それが、世間という怪物の残酷さだ。だから、親はどこでも生きてゆける人間関係のマナーを教えなければいけないのではないかと思う。それが、真の親子愛ではないのかと・・・・

現代の世相を心理的に分析すると、「自分に自信のない人が多い時代」だと思う。自分に自信がない人ほど、自分に自信のある人に憧れを持つ。亀田選手を支えているファン心理は、自分が「わがままに生きたい、言いたいことを言いたい」という思いを彼の姿に投影する。本当に、彼が好きなのか、彼のわがままに振る舞える立場に憧れているのかは本人にも分っていない。ホリエモンしかり、細木数子しかり、言いたいことを言い、やりたいことをやる姿に、憧れを持つ。小泉総理の人気も同じかもしれない。そして、憧れると、何が善くて、何が悪いという判断能力が欠如する。

たとえば細木さんの、親を敬え、家族を支えるのは母親だ、自殺はよくないなど、共感することも多々あるが、すぐに興奮して人に「死ぬよ」と言うのはよくないと思うし、予想がはずれても、それを無視するのはどうかと思う。

何が正しくて何が間違いかをしっかり見極めるのが、これからの大人の能力です。好きとなれば、すべてが良いというのは子供の心理なのです。亀田選手のトレーニングで頑張る姿はスゴイと思う。でも、相手選手に対する武士道の無さはおかしいとか思うとか、適度な冷静な視点が必要です。

今までのように、我が国は正しい、我が宗教は正しい、と思いを強めると戦争になるし、またオウム真理教のようなカルト集団によってマインドコントロールされることになる。自分の国のここは正義だが、ここはエゴだとか。小泉首相のここがよいが、ここは問題だとかという具合に。

今の時代は、すべての人々が、色んな角度で客観的に見る能力を磨かないと、また私達は、戦争という自国の正しさだけに突っ走る暗黒の時代に逆戻りしてしまう。もちろん、これは日本だけではなく、世界中の人々にも言えることですが。

告白すると、先日、長男と取っ組み合いのケンカをしました。幼い幼いと思っていた息子が、中学三年になって、この春から急に背が伸びだし、今では僕に背が並ぶ勢いです。
最近、ふとした会話の中で息子の「大人」を無意識には感じてはいたのです。

妻が身体によいという振動の音楽テープを買ったことを、僕に説明をしていた時の話。妻の話を聞きながら、息子が「ママ、それをいくらで買ったん」妻「〇千円」息子は、すかさず「ママ、それボッタくりやん。ママは人がいいから、だまされやすいなぁ。」

僕も内心同じように思っていたことを息子に言われ、言葉に出しはしなかったけれど心の中で共感した。「まぁ。それが良かれと思って買って来たんだから。きっとママには効くはず。お前もそう思って聞いたほうがいいぞ」と応えながら、こんなに母親を客観的に見るなんてと驚いていました。

そんなある日、いつものように出張から帰り、妻から留守中の家のことを聞いていると、「今日、空悟（くうご：息子の名前）は、友達と朝待ち合わせをして映画を観に出かけたけど、すぐに帰ってきたの。私、お友達とケンカでもしたのかと思って尋ねてみたら、違うって言うし。すぐに勉強を始め

て・・・」

「そう」と僕は応えて、気になったので、「おーい。空悟こっちに来いよ」自室にいた彼を呼ぶ。勉強しているところをムリに呼び出しをくらった彼は「なに？」と不満気。

「今日、ゲド戦記を観に行ったんだって？どうだった？」「おもしろかった」と彼。
「どう、おもしろかったんや。お前、最近センテンス短すぎ。会話やないな。『おもしろかった』勉強は『できた』クラブは『楽しかった』それじゃ、小学生との会話みたい。どうおもしろかったのか長い文章で話てくれる？」と僕。

彼は困ったような、泣きそうなような顔をした後、なんで勉強している途中で、出張続きの父親に、帰って来て早々に呼び出されてお小言を言われるのかとでも思っているのか、不満な顔をのぞかせて目を見ない。最近この顔が多い。

僕も会話もろくに出来ないのかと呆れ、「あのさ。お前のその態度おかしいぞ。映画の話をしているだけやんか。なんだ、その態度」と頭を軽く“ポカッ”。彼は何かの怒りを吐き出すように「叩くな！」と初めて僕に反抗した顔。意外な反応にうろたえて「なんだ、その態度は！」と僕は一喝。彼はスゴイけんまくで「叩くなって言ったんや！」明らかな息子の完全な反抗に「お前、その言い方はなんなんだ」と胸ぐらをつかむと、彼は僕の手を振りほどいて僕に体当たりした。後ずさりするくらいスゴイ力！

子供だと思っていた息子の成長と反抗。驚きと、不思議な感覚にうろたえる我が身。危うく後ずさりした後、体勢を整え、彼の頭を小脇に抱えてヘッドロック「調子にのるな」そのまま彼を投げ飛ばした。ここで彼は泣くか、もうあきらめると僕は思っていた。

しかし、彼は「ウオー！」と言って泣きもしないで、謝ることもなく、僕に向かってくる。その時、息子は完全に「男」の顔していた。「自分は間違ったことは言っていない」という真っ赤な顔で彼は向かってくる。その姿に、僕はまぶしさすら感じていた。

幼い日にガンという大病した彼。ダメだとあきらめた日もあった。いつか、こんな日を夢見た自分自身。憧れと現実が交差する瞬間。家庭内の修羅場がスローモーションのように僕には映る。寂しさと、驚きが同時に胸によぎる。「もう少しだけ親子でいたい」「早すぎる、神様。」「今なのですか？」「それに僕は、何も心の準備ができていない」色んな気持ちが心に浮かぶ。

でも、心の中心に在ったのは「まだ彼の強い父親でいたい」僕は本気で殴りました。「戦いの痛さと怖さを学ばせる」そのために。

勢いが増す男同士の取っ組み合いに、妻は、僕と息子の間に割り込もうとし、小学生の娘は「止めて！パパー」と泣きながら叫ぶ！かわいい愛犬まで異様な事態に初めて僕に吠えた。家の中はパニック！

父親と息子の戦いに、誰も入り込む余地など無い。いや入らせたくはない。これは男同士の戦い。妻は息子を助けたくて「空悟！パパに謝りなさい！」と叫ぶ。「お前は入るな！関係ない！」と僕。

「空悟、謝らなくていい。死に物狂いで来るなら来いや！お前は誰に、大きな声を荒げたんだ！」僕が数発殴った後で、母の哀願する声にうながされて、彼は口を切りながら、「御免なさい」と、僕におさえ込まれた腕への、力をゆるめた。

彼の「御免なさい」と言う時に、彼のキレイな歯に、血がにじんでいるのを見て、僕は「泣きそうな」気持ちと、「なんでそこまで」という後悔の気持ちと、「いや、これでよかった」と思う気持ちのカクテルで、心が崩れ落ちそうだった。

確かに僕は感じていた。彼を殴りながらも、僕は息子が、こんなに愛おしいと・・・・これが「親離れ」の儀式・・・それも何の前ぶれもなく、何気ない日常に・・・・

僕は息を整えながら、「お前、お前さぁ、何をイライラしてんだ。話してみろよ。お前の気持ちが知りたい」と乱れたシャツのボタンを留める。

彼も興奮しながら、「今日、友達と映画に行って、友達はその後、『遊びに行こう。空悟』って、みんなで誘ってくれたけど、僕は受験やし、1年生・2年生の復習しなアカンから、帰って勉強しょう思って帰って来てんでぇ。みんな楽しく遊びに行ったのに」

「そうか遊びたかったんか」と僕。「それに映画を観た後、友達と映画の感想を話し合ったら、僕は皆とズレててん。だから、僕の解釈がおかしいんやと思ったから、パパに感想聞かれても理解されへんと思ってん。」

「あのなぁ。パパはお前に映画の解説してもらいたいなんて思ってない。お前は映画解説者か？違うやろ。パパはさぁ、昔、ゲド戦記読んでえらく感動したから、空悟が、その同じタイトルの映画を観て何を思ったか、どう、感じたか知りたかったんや。映画の内容を知りたいなら、自分で観に行く。俺は、空悟の感想を聞きたいし、それが人と違ってても いいやン。お前がそう感じたなら、それがお前の感想やン。正しいも間違いもないんちゃうか」息がまだ上がる自分を感じる。

「おい、そこに正座せい」そして座った彼を抱きしめた。

「空悟、お前スゴイよ。ほんまに。パパは意味なく自分の父親が怖かったけど、お前はパパに向かって来れるんやから。お前は根性あるよ。お前も知ってるやろ、幼い日に、お前は大病して、さよならをするかもしれない子供だった。だから、こうしてケンカできるくらい大きくなったのは夢のようや。びっくりしたけど、お前と取っ組み合いできるのは夢のようにうれしいッ。それがパパの夢やったからなぁ」涙声になる。

彼は小さく「ごめんなさい」と言って泣き出した。空悟のこぶしに涙が落ちた。また、愛おしいと思う。

「しかし、空悟、かん違いしたらあかん。お前は誰に向かって大きな声を出したんや。かりにも親だぞ。いま、お前と実夢（みむ：娘の名前）は、パパとママの家に住まわせてもらっているんだ。忘れるな。」

「お前達もいつかは大人になって出て行くだろう。でも、お前は今、パパの家に住んでいる。お前の部屋も、お前の服も、パパ達に買い与えてもらっているんだ。だから、お前が文句あるなら、家を出なさい。ただし、その時は、自分で住むところを探して、自分でしっかり食べること。お前さ、去年の学校の勤労体験実習で、働いただろう。あの時は先生に働く場所を紹介してもらったよな。でも、お前が家を出る時は、自分で仕事を探すことになるんやぞ。お前にその準備が出来ているんか？できていないのに偉そうにするのは勘違いや。」

泣いている娘にも「実夢もよく聞いてなさい。これは空悟だけでない。お前にも言えること」と娘を見る。
娘も「はい」と涙ながらに返事をする。娘に対しても愛おしさがこみ上げてくる。

「パパはいつも思っている。お前達とさよならする時を。それは覚悟をしている。パパはお前達を死ぬほど愛している。でも、よくテレビに、親にたて突いて、家に住み続ける子供とかが出てくるよなぁ。「オヤジ、うるせんだよ！」とか生意気な口をきいて、母親に暴力を振るって家に居る子供が。でもなぁ、ウチにかんしては、あれは無い。ありえへん。」

「親にたて突いて親のスネかじりながら生きているなんて、パパはあれだけは我慢できへん。ましてや、空悟はママに赤ちゃんの時にさんざん心配させたんだ。パパに向かってくることは許すが、ママへの暴力は絶対許さへん。」

「あと四、五年もすれば、空悟はパパを負かせるかもしれん。でも、その時は、お前が家を出る時や。わかったか。親に歯向かって家に居るなんて、もってのほかだからな。子供に暴力を振るわれて、子供に脅えながら家におらせるなんて、ウチにはありえへん。警察に訴えても家から出すべきだとパパは思ってる。」

「それに、空悟。今度、パパに向かってくるなら、パパがママに暴力をふるった時とか、実夢に理由なく手を上げた時は、今みたいに勇気を出して俺に向かって来い。その時は、お前を男として認めてやる。でも、今日のお前のキレかたはなんや。今日、お前は、お前のために向かってきたんや。空悟の中に、たぶん『僕は勉強のために帰って来たのに』って気持ちがあったんやと思う。」

「勉強はパパとママのためやない。お前のためや。パパのために勉強するなら、そんな勉強は辞めたらいい。空悟それやったらしっかり遊べよ。今日ママが遊ばないで帰ってきなさいって言ったか？お前は自分で判断して帰って来たんや。それなら、腹を立てるのは筋違いや。」

「お前の気持ちはわからんことはない。きっとお前は遊びたかったんや。それやったら遊べよ。それのほうがズーツとましや。人は誰かのために『～したったと思ったら』腹立つはなぁ。でも、お前は今日、自分で決めて遊ばんと家に帰って来たはず。だったら男が自分で決めたことに腹立つのはおかしいわ。『お前は自分だけが遊ばないで帰って来たのに』と自分が可愛そうになったやろ。気持ちはわかる。だから、お前は自分が可哀想と思って腹立てたんや。だから、怒ってんな。」

「でも、それは自分が可哀想という怒りや。それはくだらない怒りや。なぁ空悟、戦うなら、誰かを守るために戦え。ママとか妹とかを守るためにとか。そうでないかぎり、自分が可哀想とか、自分が惨めやとかで、人と争うのはバカみたいや。」

「人と争う時には、忘れるなよ。今日みたいにケンカは痛いんや。この痛みだけは絶対に忘れるなよ。だから、簡単に大きな声を出すものやないわ。わかったか。絶対、痛みとともに忘れてくれるなよ」彼は深くうなずいた。

「そして、変な話かもしれんが、最近よくニュースに出てくるような意味ない意地とか、楽しみのために、お前が誰かを殺したら、パパがお前を殺す。自分の子供が、人を殺めておいて、自分の子供を弁護する親にだけはなりたくないとパパは思っている。それは、お前を愛しているからだ。だから、パパがお前を殺す。そして、お前と共にパパも命を終わらせる。だから、ケンカする時は思い出してくれ。パパのことと、今の痛みを。ケンカは痛い。パパと勝負してまでも、意味のあるケンカかっとよく考えてから戦え」

僕は正座しながら、うな垂れている彼が、かわいくて仕方がなかった。

「痛かっただろ、空悟。ケンカは本当に痛いや。殴っても殴られても、お前、明日きっと顔が腫れるぞ。その痛みと顔の腫れを、よく憶えておきなさい。ケンカは、お前か、相手が顔腫れて、痛いんよ。いいか昔は、武士が刀を抜いたら、命のやり取りが起こるんよ。それを覚悟で刀を抜く。ケンカも同じ。まかり間違えば命がなくなる。それがケンカや。」
「だから、大きな声を出すときは、よっぽどの時でないとダメやで。お前も中三で受験でイライラもしているんだろうけど。そんなにイライラするくらいなら、楽しくない勉強なら止めるのも選択や。もし、お前が勉強が本当につらくて、嫌いなら、働くのもいいぞ。汗をかいて働く。これは凄いことだ。だから、パパやママのために勉強をするなぁ。」

「パパは中卒でもいいと思っている。お前の覚悟があればな。パパは誰にも胸張って言えるぞ。僕の息子は中卒ですってな。何も恥ずかしことやない。パパはその時にシッカリ言うたる。今、空悟は人のために、社会で働いていますって。でも、お前が今は働く自信がないなら、今は学生をするしかないんとちがうか？したいことが固まるまでは。となれば、お前は間借りして住まわせてもらっているんや。そしたら、大家さんに偉そうに言うたらアカンわ。」

「それに、パパは、お前がどこどこの学校に行ってくれとは思ってない。お前が行けるところに行けばいい。でも、受験の時くらい「あの時ガンバリました」と思えるくらいの記憶があってもいいじゃないか。自分で最善を尽くして、行ける学校に行けばいい。だめなら、社会のために働こうよ。それだけやん。ノビノビ行こうよ」

その後は、「御免なぁ。痛かったやろ。冷やしとき。でも、お前は力があるよ・・・・」僕は彼の頭をなぜて、それから二階のリビングにあがり、放心状態。小さい時からの彼の思い出が蘇っては消えてゆく。

妻が上がって来て「大丈夫？」「僕は大丈夫だから空悟のところへ行ってくれ。あいつが心配だから」「空悟は大丈夫。それと、あの子は、あなたの顔を殴ろうとはしてなかったよ・・・あの子はあの子で・・・・」って「それは、わかっているから。一人にさせて欲しい」彼がどんなに怒っていても、僕の顔を殴る気がなかったことは僕も感じていた。その夜は、家族揃って外食。何もなかったように普通の会話をして、普通に「おやすみ」を言って就寝。

次の日は、娘の実夢は林間学校で吉野へ。あれだけ楽しみにしていた林間学校を、朝には「行きたくないな」とポツリ。「どうして？」と妻に聞かれ、「また、パパと空悟がケンカしたらイヤだから」小さいと思っていても、それぞれが成長している。その娘との会話を妻から聞いて、僕は後悔で苦笑い。

その日は、久しぶりに僕の休みで息子と妻の三人で、食道ガンで入院している義理の父の病院にお見舞に行った。彼の腫れた顔を見て義理の母が、「どうしたの、その顔」空悟は何でもないように「家の階段でこけてん」「家の階段で、こけてそんなところ打つ？」「実際に打ってもん。しゃあない」と何気なく応える。また、男を感じる。

帰り、息子と二人きりになった時に、「空悟。お前さぁ。少し前に友達の前でパパと呼んで笑われて、ママに『パパ』以外の言い方で、パパをこれから呼ぼうかなって言ったらしいなぁ。パパも、もうパパはヘンかもしれんと思うし、そろそろ、他の言い方で呼んでもみるか」

彼はボソッと「パパでええやん」「もちろん、お前が気にしなければいいけど、気になるなら別な呼びかたで」「なんて呼ぶの？」「そうだな。父上」「時代劇やん」と彼。「でも、俺はオヤジ～ではないし、オヤジと言われると、なんかオヤジになって行きそうでイヤやな。言い方は空悟に任せとく。お前も“大人”なんやから」「僕は、まだパパでいい。友達の前では、違う名前で呼んでるし」「そうなんや・・・」

・・・・それがパパは気になるのだけど、空悟君・・・

でも、この数日というもの、いっきょにパパも老けたような気がしました。いつも若い気持ちではいるのだけど、いつも君たちは僕を現実の世界に引き戻す。マイホームパパでは決してないけれど、父親としては失格かもしれないけど、オトナの男としてはステキなモデルでありたい。

お前が、いつか僕からもまぶしく、頼れる男に成れる日まで。

だから、今はお前には負けるわけにはいかない！